

### 薬物依存に苦しむ人を救うために必要なことは、 刑罰よりもリハビリ。

**志立玲子さん**  
しだち・れいこ リーガル・ン  
ーシャルワーカー、精神保健福  
社士。一般企業を経て法律事務  
所などで勤務。2004年から  
アパリ職員に。



**覚** せい剤や大麻などの薬物は  
ネットでの密売も横行し、  
今や普通の人でも入手できる時代  
だ。常習者は警察に捕まっても薬  
を断ち切れず、再犯率は高い。

「犯罪というより薬物依存症とい  
う病なのです。自分では病気の認  
識を持ってません。治療しない限り  
何度刑務所に入っても自由の身に  
なると再び薬に手を出してしまう。  
病院やりハビリ施設に入るのも嫌  
がる。そんな人たちを何とかして施  
設につなげることが私の仕事です」

こう話す志立玲子さんは、リー  
ガル(司法)ソーシャルワーカー  
としてNPO法人アパリ(アジア  
太平洋地域アディクション研究  
所)で働いている。

アパリは、薬物依存症から回復  
するための様々な支援を行って  
おり、日本で初めての「司法プログ

アパリが運営する「日本ダルクアウェイク  
ニングハウス」(群馬県藤岡市)でグループ  
セラピーをする人形者たち。



ラム」の普及に力を入れている。  
家族や弁護士からの連絡を受け、  
逮捕された人と面会し、保釈また  
は刑務所を出たらその足でリハビ  
リ施設に入所することを約束させ  
る。裁判で有利な証拠となるため  
本人も受け入れやすいという。

「そもそも薬物使用だけで長期間  
刑務所に入る国は先進国では日本  
以外ほとんどありません。刑罰よ  
りも一刻も早い治療・リハビリが  
再犯を防ぐために必要です」

ある日の志立さんの仕事を追っ  
た。午前は東京地裁で30代男性の  
公判に情状証人として出廷し、  
「アパリの施設の責任者が身元引  
受人となるので寛大な措置を」と  
訴えた。午後は警察署から保釈さ  
れた40代男性を、群馬県のリハビ  
リ施設に新幹線で送った。男性は  
2人とも過去に服役したがまた覚

せい剤を使ってしまったという。  
「私たちに相談が来るのは2、3  
度目の逮捕の人が大半です。初犯  
だと執行猶予が付き裁判が終わり  
ば野放し状態になってしまう。最  
初の逮捕時にプログラムを受けて  
いたら、と残念でなりません」

志立さんは依存症の娘、息子を  
抱える家族を支援する「家族教  
室」の講師も務める。施設につな  
げるには家族の協力が不可欠だ。  
「親が子どもの暴力や自殺を恐れ  
言われるままに金を渡し、子ども  
は薬物を買いつける。いかに腹を  
決めて子どもを突き放せるかにか  
かっている。施設を逃げて帰って  
きても基本的には家に入れてはい  
けない、と教えています」

ある母親は刑務所に入った娘か  
ら「お母さんが敷いたレールを少  
し外れただけなのにすごく厳しく  
怒られた」と昔のことを責められ  
たと話した。

「自分の価値観を押し付けたり、  
母子密着など極端なタイプの親が  
多い。誰もがうらやむようなエリ  
ートの両親も相談に来る。家庭崩  
壊や虐待など様々な要因で心が傷  
つき寂しさを抱えた子どもは、薬  
物の誘いに乗りやすいのです」

子どもを回復させるには親も変  
わらなければいけない。家族教室  
では、適切なコミュニケーション  
の練習も行う。「子どもの言いな  
りや攻撃的になってはだめ。私は

こう思うけどあなたはどうか? と  
いうふうに、落ち着いた配慮ある  
話し方が大事です」

**ア**パリが運営するリハビリ施  
設は群馬県藤岡市の山中に  
ある「日本ダルクアウェイクニ  
グハウス」。施設長やスタッフは  
元依存症者で、入所者と共同生活  
し回復へ導く。毎日2回開かれる  
グループセラピーでは、円座にな  
って一人ずつ自分の過去や思いを  
語る。批判や指導はされず「言い  
っぱなし聞きっぱなし」が原則だ。  
仲間の話を聞くことで徐々に自分  
自身の問題に気づいていくという。

中には逃げ出して元の生活に戻  
ってしまう人もいる。嘘をついた  
り、わがままを言ったりと、依存  
症特有の行動に振り回されること  
も。しかし志立さんには最近うれ  
しい出来事があった。施設を5カ  
所も転々とし、薬物とも手が切れ  
なかつた30代の元会社員の男性と、  
1年ぶりに会った時のことだ。

「施設の催しで披露した劇で生き  
生きと演じて、まるで別人でした。  
いつも施設を出たいと不満げだつ  
たのに、今度コンビニのアルバイト  
が決まったんだってうれしそう  
に教えてくれて。人はここまで変  
わるのかと感動しました」

●ひとりひとりの顔が違つように、人によつて暮  
らし方や考え方は千差万別。ところが、日常のあ  
らゆる場面で、自分は違つて思つていても、多く  
の人と同じ振る舞いや考え方を求められがちです。  
どうすれば違いを違ひとしてお互いに認めあい、  
心地よく過ごせるのかを考えてみませんか。

アパリのパンフレット。連絡先 〒162-0055 東京都新  
宿区余丁町14・4 ☎03・5925・8848